

鯉淵信一先生を送ることば

栗原 孝

私が鯉淵先生ときちんことばを交わさせていただいたのは、1990年代の半ばであったと記憶している。国際関係学部が設立され同じ学部の教員として仕事をしていたにもかかわらず、先生とお話しする機会はなかった。それが、たしか私の教務主任時代に、「基礎ゼミ」であったと思うが担当していただく交渉をすることになった。「出会いの広場」の帰り、鬼怒川からの電車の中であった。先生は学生の自主性を重んじ、国際関係学部の細かな学生指導はあまりお好きではないようだと聞いていた私は、恐る恐るお願いした。ところが思いのほか簡単に快諾していただき、車窓の景色がいっそうきれいに見えたことを覚えている。しかし、それから特に親しくお付き合いいただくこともなく過ごしていた。それが、先生が学長になられたのをきっかけに一転した。

先生は、2000年に亜細亜大学卒業生最初の学長となり、キャンパス再開発、教養部分属など多くの課題に取り組み、「アジア夢カレッジ」を設置し運営にあたられた。私はこの10年間、身近で仕事をする機会を得、多くの教をいただくことになった。ことにモンゴルと共に生きることを願い過ぎて来られた一途な生き方、そのモンゴルの大地と空の広さを心身に染み込ませたかのような茫洋たるお人柄には、学び尽くせないものがある。ここに私の知る先生の姿と業績の一端を紹介し、感謝の意を表すとともに、先生の新たな一歩をお祝いすることにしたい。

先生は、1963年に亜細亜大学に入学し、麻生達男、木村肥佐生の両先生についてモンゴル語を学びモンゴルと出会った。そして、志を立ててモンゴルに渡るべく外務省に足繁く通い、『モンゴル月報』の翻訳・編集などの仕事をした。その結果1973年、「鯉淵の他になし」と言わしめて在モンゴル日

本大使館に初の海外派遣員として勤務したと伺っている。

この経験が、学長になられたのを機会に、志を持ち一途に邁進することの大切さを今の若者に伝えたい、亜細亜大学の建学の精神を育む教育プログラムを作りたい、という強い思いとなり、「アジア夢カレッジ」を生み出したと理解している。「アジア夢カレッジ」は先生と意思を同じくする教職員を元気づけ、その土壌に実を結んだものである。大学にとって有形無形の意義深い成果を残していただいたと考えている。

もちろん先生の残されたのはそれだけではない。先生は、大学卒業と同時に加入した「日本モンゴル協会」や、亜細亜大学に奉職された1976年に加入した「日本モンゴル学会」などを通じて、数多くの論文、本を著したモンゴル研究者として知られるが、さらに広くモンゴルと日本の交流に大きな足跡を印し続けてこられた。モンゴルを描く数々の映画、TVドキュメンタリーや本の翻訳、監修に携わり、司馬遼太郎、開高健、椎名誠等の方々をかの地に案内し親交を持たれ、その作品に大きく寄与された。正月にはモンゴル出身力士を大学に招いて近隣の子どもたちとの交流の場を設け、モンゴルからの留学生には日本の親としてご夫婦で親身にお世話をされてきた。さらに、こうした留学卒業生や親交のある方々が『源氏物語』『武士道』『学問のすゝめ』などをモンゴル語に翻訳する仕事にも監訳者、監修者として携わり、日本文化のモンゴルでの普及に力を注がれている。

この多岐にわたる仕事と交流は先生の懐の広さを良く表すものであるが、先生は、その蓄積を大学のために大いに提供された。私の知る学長時代、先生ご自身のマスコミ露出度の高さは言うまでもなく、国内外での会議や折衝、人材の活用などにあたり、先生の知名度と人脈は大学にとって大きな力であった。その成果はこれからも大学の財産であり続けるであろうし、大学はそれを生かす工夫と努力をしなくてはならないであろう。

ところで先生は、いわく、「水戸っぼ」で「気が短い」のだそうである。その本当の意味はわからないが、私が一緒に仕事をさせていただいて知る先生は、豪放で繊細、我慢強くて短気、真面目でかつ大うそをつける方、そし

て、それらが相まって不思議な包容力となっている方である。私はそれによってずいぶん救われた。感謝を申し上げたい。

重責を担われ、難事、心配事、不安は数多く、先生がそれを口にされたこともあったはずである。ご自身から「腹が立って……」と、話を伺った記憶もたしかにある。後になって関係者から「あの時、実は大変だったんです」「困った」と教えられた件もあった。しかし、なぜか私の記憶には、笑顔で「心配ない」「大丈夫」と声をかけて下さり、私の発言や事の成り行きに不安を抱いたり腹を立てられたであろう時も、「待ちましょう」「良いですね」と見守って下さったことが印象深く残っている。

また、私は問題があっても実のところせっぱ詰まらなないと考えないのに対し、先生は朝から研究室に電話してこられ、数々のアイデアを提供して下さいました。会議で説明や説得が難しそうな時には、先生にお願いするとやんわりと話をされ、場を荒立てることなく了解が得られた。あるいは私が議論の混乱に難儀していると、毅然とした口調ですじを通し納めて下さった。一緒に仕事をさせていただいた間、不思議な安心感に包まれていたと言うのが偽らざる感想であり、懐かしい感覚として思い起こされる。

この包容力はモンゴルで身につけて来られたものであろう、と推測している。先生はこれまで40年近く、とくにこの10年間は忙しい仕事の合間をぬって、毎年数回、モンゴルの広大な平原に「帰り」続けて来られた。そのたびに、夜空の満天の星を仰ぎ、羊の肉と酒を心行くまで味わい、なじみの人たちと歓談されてきたのであろう。「いつかモンゴルへ」と誘う先生の目もと口もとには笑みが溢れる。私はその笑みに接するたびに、努力や苦労はあたりまえ、一途に、それも心大きく楽しむべし、という教えと受け止め、心に刻みつつ我が身を省みてきた。しかし、これはなかなか習うには難しく、私の課題であり続けるであろう。

これから先生は、まずはゆっくり休み、大好きな釣りをし、いずれモンゴル語の辞書の編纂などこれまで手が回らなかった仕事に取り組みされるとお聞きしている。大いに楽しんでいただきたい。そして疲れた時、モンゴルは少

し遠いという時は、先生が学生時代を過ごされた、また私の故郷である五日市においでになり、秋川のせせらぎを楽しんでいただければと思っている。柿の実の色づく頃が良いかもしれない。